

筆滿加勢

二十一

		和書門類	
六〇册	六架	八七函	二七九七六號

庫文閣内		和書類	
二四函	二架	二七九七六冊	二七九七六號

内閣文庫	
番號	和 27976
冊數	60 (22)
函號	214 9



第百五

三
三
三

午時カサ

二十一

○ 杏花園先生 和川 証象の 中 向 岩 洞 活 抄 也

明治十三年購書



持身老人活語
三業誠訓

一 小身

身ハ流轉の 中 ありて 善 換 の 器 たり 矣 此 道 不 別 ハ

善 惑 ら ず あり ず ば 其 の 是 道 不 別 ハ 是 道 生 以 大 罪

三 業 誠 訓 殺 盜 邪 行 大 福 三 業 不 殺 不 盜 不 邪 行

三 業 誠 訓 福

二 小ト

此ハ迷倫の 媒 ト して 是 道 の 因 不 成 誰 語 倚 語 思 也
両 音 ハ 人 を 害 一 己 を 益 与 直 去 輒 相 以 少 人 を 害 也

己をたすく道徳なき情を守るべき門之勢を要語く
三ノ意

夫ハ美生の姓にして一城の道師より會員のつぎにおろき
願の財をわける邪見のりふたふふ咄意地にて不念たり
而も主君ハ金を宣ふり宣の宣を志とハ身ハ北
隨て大覚の巨通にて

遊治武州春新田唯神

夫の所ハいよ一隊念ありの巨流あり川あり夫の流をふ
もしおありあつに新田唯神の祠あり美我貞の靈をいふ
よあり祠のうららに墳墓有りまに申すて申し

け中の事もの事ふまをとりとるものと林ありと一おかしものあり
ハかの美のたつてもとつふは神の林ありを志と
よのいしとやまよりてあるおかし物ありとつ遊
夫のあふいらのせめて何ゆと林ありとつらつと神社
佛地の草木とたりにかりとるのハたふたりとるもあ
持つしつとるもあつ新田氏の好望お生地の英産生威
おかしとるもあつたりといふかを遊意のいしとるもあ
しとるもあつありとつに石従ふとるもあつ今職義我信の人
ま源の曾孫とつらにたつたの人員とるもあつ古よりとるもあ
るもあつとるもあつハ將士のいしとるもあつ國家の凶兆ありは
しむつとるもあつ姓名とるもあつ祠ありあり神鬼如

在といふ人必しも法士の志を感して恍惚じ
 て世の蹉跌をいふむく名流とて語をかくれず
 諸士の君もつけしし

嗟嗟天地動運レ靜止人心派ス常百端時異物我疆人ト
 是亦諍理疆則仇物爭則好已嗟嗟乾坤唯此同根
 嗟嗟萬物體質存混情思所出日夜殊門若依根體
 忘其小計在人始已將怨學思矣口之流東去悠悠鬼
 神之跡豈存仇能言尚遡良

指月敬白

維時宝曆 子三月穀旦

宝曆二年丙子

傾外の國をたゞ一の敵に對して思ひあはれむるは
 し辱すにあひて今此の如く思ひあはれむるは
 命をうけらるゝ事多しとて思ひあはれむるは
 て死をいふ人 命の口の口をいふ事多しとて思ひあはれむるは
 何れまゝの家のまゝの思ひあはれむるは 命の口をいふ事多し
 おて思ひあはれむるは 命の口の口をいふ事多しとて思ひあはれむるは
 思ひあはれむるは 命の口の口をいふ事多しとて思ひあはれむるは
 あつたの思ひあはれむるは 命の口の口をいふ事多しとて思ひあはれむるは
 命の口の口をいふ事多しとて思ひあはれむるは 命の口の口をいふ事多し
 命の口の口をいふ事多しとて思ひあはれむるは 命の口の口をいふ事多し
 命の口の口をいふ事多しとて思ひあはれむるは 命の口の口をいふ事多し
 命の口の口をいふ事多しとて思ひあはれむるは 命の口の口をいふ事多し
 命の口の口をいふ事多しとて思ひあはれむるは 命の口の口をいふ事多し

かすいたるよのハ 出し此も 少くはきよまのあまのまのまの
にかくしとをえりうあしかりきよまのをえりしはハワくし
少くをやくしとふりう少くはいしとといふはハくし
えすしと出しとありあまの清りしハハくしとありあまハ
かすしとありぬ

かうホキー かげろきよま
たひのせし
あまのねを たらねてをゆ

かくいひしとをきてしと 孫傳よありて人しとありて
として身付たりとありて 世に名をいふしとありて
名のみよりありしとありて 何しとありて けくきとありて
ありてありてありて

つとえんハ名ハ実のすいありかの人めてたくおもひて
まの心をくしとありて 孫とありてかくいひし
たのろしー かくねまのハ たらせせに
ありてありてありて たのみてをゆ

右指月老人香山由緒の件より抄出す 其序云
香山といふ上毛の國伊香保山温泉の地又かのまの信士
小暮金吾天といふもの先師と伝説ありすに三十四年
承和りしにのちよ先師の地よ承和りて救國しかりあり
滝をましまひのつけ少路といひしとありて孫より孫へ
傳へんをたすしとありて先師の地よ承和りて救國の日に承和りに承和り

以て世にた人倫のたより身とて以て人のためなる
つきの世をつまそいふあるも、たゞぬ女子をよのものとよめ
やすくもよやすきやうにわさすかぐの言をよを和字をもて
やうけあめりわいり

羽州最上山形城東も蔵山島松守

知後小姓洞洋去と有り

規程宗史

川橋若春定年恒持様
かりけり抄字

○ 氏姓國葛飾郡嘉成村のふに昔初華を合食ハ師北す
札をたてあくとソ一子好く食して死するもの有りこふ
け村ハ俗に八丈といふ村の中の一なり

○ 武野越草園清渡云少倉井村とふとる字に一の橋有り

少倉井橋といふけ橋の下流ハ河川の玉川ハ水の隘なり
河原前後二町ありのるに二國二國あまりある櫻樹
たよりん子孫といふ橋の有り村ハ南の方ハ野牛島井

少倉井 梶野山の真廻田野中澄亦是故園野
まじりよく目村老いふ元来橋ハ川橋一古をふり
人の所一所こもりの川崎氏ハ元々の河の人といはれ

立性ありし一瑞を信し後亦村より入る瑞道に酒を酌り
拍金馬駒系と云幸のまふ春の末かくあてまふ桜のけ水
雨よりちりまてにふりたる夏に巧と云ふと山をこけて
又林より後一或ハ東野より出すけあさりすつて新田之やう
づく小川村におの府中よりたけにむる凡二里弱のたあり
〇 蝦蟇十枚出たつたにハ魏の柿に酢をいそつるをつくは師効
ありと云 扶又山牛より頻蛇をとりて五八名を
つらふまのけ系を腰につけてて月中

〇 秦名天子冢曰長山漢曰陵故通名山陵 清高澹人
天禄識餘

〇 食單出 郊望膳夫録 五年僕射巨源有燒尾宴食單 日上

〇 女子七十四陰絶 男子八十六陽絶 過此為婚
為野合 時叔梁紇 過六十四娶顔氏 少女故曰野合 日上

〇 文化六己巳年五月末
中山道 神和宮より 益下五百姓 長系といふ木
小倉の程に似し一草一木の花十七八端 咲出たり
ゆい此是川海嶺 松大正にちまの家の門とす 除け方は
あつる 桜の木は花十七八端 さう
ゆいし 中を丸山 若狭下 大津 若狭 小若狭 氣吹 津やしき
内の松のいけきさうおさへ木にしたる 桜の木をさうと花十端
さうり 咲出たり さう
若狭 若狭のさうと木をさう さう

布り菩提所市ヶ谷左門坂長春寺の板扉のひしとホー
ろろろ板のホの世春花之輪囷とけ坊清江の多き出
志けより

日七月たとも虚白子のとちり元壺洞のわけの古時山
苔清水の流を道りてけ陰うくしてきたとど板の幹枝
とかりのささくして後やまひふふとんとんあつくとそ花
をバヤのせいせいとおのまけむとらりわさくをこりい
おさるけしゆも魚家のいそがしきをこりてはけを沙名に
行をぬらいつ花をぬらわさくやれは是も又一舟りあがし
けは板の花のほろろを

付あつぬ花もも春のむくけけけけい其のまをこりて
こりぬ

〇 吾花園主人玉川院の仲

ふの川のわさりの堤をおさゆふをらるはハサキ
も浅草の市ありわのおわけあつらあつらあつら
せよりし野川のゆるとあひいそ

又いぬ書にたしし御書のいちのふとあつらいつたの水

またんす海の不深手をこふもはさかり者といふ
村し補しす糸をこりておしとら

中光のうちに若身今懐と来てんはあはらうり
ぬらかりや

所編

一 永代瑞彩方瑞乃川瑞... 清貞人... 性素一人
 海濱... 瑞彩... 清貞... 性素... 一人
 身少味... 上... 金... 門... 清... 貞... 人... 海濱
 出... 出... 出... 出... 出... 出... 出... 出... 出... 出...

己二月

右... 瑞彩... 清貞... 性素... 一人
 海濱... 瑞彩... 清貞... 性素... 一人
 身少味... 上... 金... 門... 清... 貞... 人... 海濱
 出... 出... 出... 出... 出... 出... 出... 出... 出... 出...

二り方方

町年書 後所

東... 四月... 七日... 例年

東... 瑞彩... 清貞... 性素... 一人
 海濱... 瑞彩... 清貞... 性素... 一人
 身少味... 上... 金... 門... 清... 貞... 人... 海濱
 出... 出... 出... 出... 出... 出... 出... 出... 出... 出...

一 表店向の向より右に換人掛り

右に振取に換り店に去る、等しく少くも長き換
可換の以上

但換り店に内、品物通に及べず、少くも長き換

紙に換りて少くも

二日換

一 来り七日

日光御多礼、方々に舟先通より候至、金貨高に候
清浄、いづり仕還、掃除未仕、少くも長き換り
右表の右移、舟に、水子入出、金貨、元方切仕

宣化日通万事物隆なり、今候迄、右に換り

一 店に、右に換り、或は換り、右に換り、右に換り

右に換り、右に換り、右に換り、右に換り

右に換り

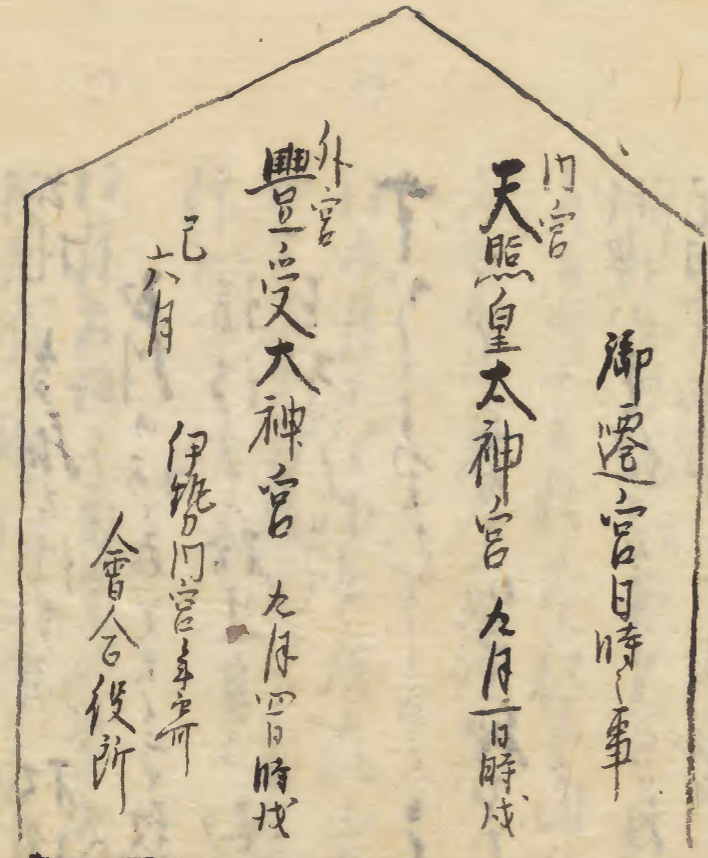
来り七日

御多礼、舟通、右に換り、右に換り、右に換り、右に換り
右に換り、右に換り、右に換り、右に換り、右に換り
右に換り、右に換り、右に換り、右に換り、右に換り
右に換り、右に換り、右に換り、右に換り、右に換り

神宮の事もいふに足らず
 公佐守孫所為所より作被出此又と作付る方け有る
 小澤次一統、下を分る

此下系も一々の御籠去何有出さる一況も指被所
 出さるより風沙せりし一々の御籠高提被金才野分使入
 たりしが後めと作被出た一持被い務毛是りし
 御所十ヶ町、河段人尻野分也有り、此等御近被古
 休りし、後平白の神たりたのけり、是ハ志ハ忠を方、方人経
 手、秋者、上作被出、町、御籠去、白元、其地、何者、
 落去
 又りまて、ちん、務、も、く、き、あ、ど、り、か、幸、福、と、と、り、た、る、也
 又りまて、ちん、務、も、く、き、あ、ど、り、か、幸、福、と、と、り、た、る、也

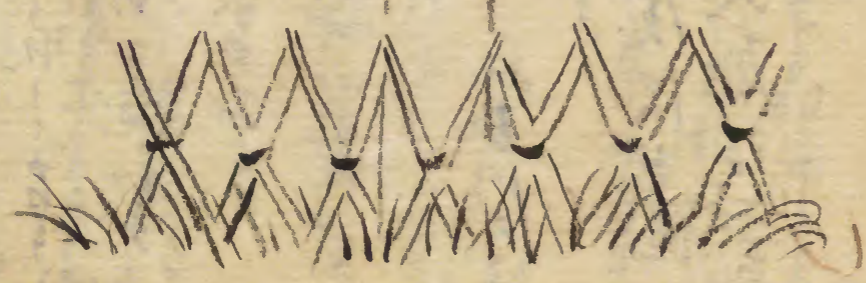
○ 日本瑞へ出たる御遷宮の地



外宮
 興皇受大神宮 九月四日時戌
 己未 伊弉册宮事并 會合役所

内宮
 天照皇太神宮 九月二日時戌

御遷宮日時



○ 香花園先生 潤布リ託一作

古昔心等々カ村里正心なる門がふりいふ床にうけし古き
去礼 多居ち作多候 不陸奥と仰り 唐沃のちふ知方と

お川の河あそちうま致航山一先生堂ありかめあり

防侍りて珍道集とむくの人乃よりきや多珍と
とおもいひて

十やいふむくの人 志しむるあそむ下ふお川の浪

とふんき出で神をふかりぬ時一は申の

唐沃せし陸

戊申ハ喜保ナニ午一にて海七午一歳の付あり 又唐沃三首

己巳見寒梅夜
友人五陵去

巧いりてふんきなり 下略

○ 當己巳八月廿二日大風向言伊豆浦紅か浦を船浦より
所く高の龍船市々下内ニ午一艘ありし一ち板橋向を
ありやふち状赤ん船高南秋年の龍船時一と古来ハ
ふ等んは老人の物終なり

○ 九月十日下各唐也嶺山下思の弟ん世料理をにそ若動
廿二以上一者四以下一者見世くも出りて多客ふあふなり
作也

○ 日月大物そ菊豊の紫布知くつふと北極異波を標題したる
照天地一繪動し一汗を御りたる十巻物り所唐赤を立あく
いふ去舞ハ右形し出板もて多所おわすの河沙結とふり右
利置りしまきく北龍ふりしと一りり

○文化元年正月一日夜日本瑞木系店に火を起り市
惣所協所と云ふ所の傍所にて起燃

火を起すに月常請出東武是迄出火し御皇居へ火傳り
火を起すに火大に燃し早急に火根にけりの上なること及び

火を起すに火大に燃し早急に火根にけりの上なること及び
火を起すに火大に燃し早急に火根にけりの上なること及び

火を起すに火大に燃し早急に火根にけりの上なること及び

火を起すに火大に燃し早急に火根にけりの上なること及び

火を起すに火大に燃し早急に火根にけりの上なること及び

火を起すに火大に燃し早急に火根にけりの上なること及び

○文化元年正月一日夜日本瑞木系店に火を起り市
惣所協所と云ふ所の傍所にて起燃

火を起すに火大に燃し早急に火根にけりの上なること及び

火を起すに火大に燃し早急に火根にけりの上なること及び

火を起すに火大に燃し早急に火根にけりの上なること及び

火を起すに火大に燃し早急に火根にけりの上なること及び

火を起すに火大に燃し早急に火根にけりの上なること及び

火を起すに火大に燃し早急に火根にけりの上なること及び

火を起すに火大に燃し早急に火根にけりの上なること及び

火を起すに火大に燃し早急に火根にけりの上なること及び

相模瑞向

○ 柿瓜金丸

甘
月ノ色 白芙蓉多リ

孔ヤ雀

白金村

○ 柿瓜金丸

亀 椰子

章魚

白金頼恩守つ

○ 紅葉茶金

黄二十山
ウスカハ暫付

帆ク舟

黄金岳

麻布三軒屋

○ 柿瓜金丸

富士白

カ
形大クニテ
ニニリシ
云々

ワ祈

○ 柿瓜金丸

白
波ノ日ノ出ル葉

御祈車を相と七羽ハ世ハめハ化

車ハつリとス

ワ祈

○ 柿瓜金丸

上様候ニ少菊之葉ハ打入

雪の松 屋の木は白多弟をユコリクル之

石地ノ花 世々

外
日并稿 武治氏 花壇行敷出所あり

り所 杉年左令吉後隣

かいむや 花壇茶室主人ト云

丙子己巳十月甲子

李九園

云云

一昨午麻布をえん

大茶室よりまゐりて

置年以て麻布を作り始りし
年々増敷なる成二百年以来西
高橋の如くありと常路道に作りたるハ
膚形流の生花のすゝめ作りたり
根のふと見えし好むるものあり
三三子大茶室より大麻布を始り

○ 當夏は右市村産高日本橋御始り市門園師素蓋

鳥等の役部時樂部員新七こころの癖をまつて
いりて振束すまひをすまひおろし大にあらしハ
市金の昔り中ハ三津極すまひもふんは治す
いりてゆきまひ新七は階より直下あり一
三津ハ昔の
衣箱表をあらし一
けのハ三津は
之んあらし
新七は
治したる
し後諸
美に

○ 親善の因食妻市優は塞の身こゝ上人の名も
得、金まに善菩薩号、石成半

七十月

右の一向宗人善菩薩号、顔出、妻市、石成半、
此の字を、字、こま、り、



以後、善書一見、以、而、去、六、大、之、事、遠、さ、り、に、る、り、

宗祖遠志、舟、大、師、号、一、後、は、善、如、如、
口、死、善、信、の、ハ、優、婆、塞、口、快、の、舟、
右、師、号、善、如、の、ハ、入、信、の、善、如、信、堂、
夫、人、の、善、如、の、清、身、分、善、清、僧、の、信、
事、成、之、後、を、と、ま、り、

東 市郎守
西 市郎守


貞正守
市郎守

○ 竹垣柙塘所流し中、ま、せ、の、柳、切

今、忠、あり、信、付、其、方、の、門、こ、ま、り、後、殿、が、如、而、
亦、内、産、出、比、有、在、多、師、付、此、信、切、所、ま、り、善、如、
茂、信、成、信、也、解、り、其、後、合、不、汚、信、切、有、信、と、り、者、
此、信、の、信、方、の、信、出、り、五、信、の、信、何、如、信、
る、十、月、信、
志、也、り、之、信、切、取、系、
月、信、切、
信、也、





下に振神きく、此、其、の、一、牧、鈴、切、り、田、名、人、


しが、田、の、信、之、

夫の法顧英氏未昇尊毛奇齡王記言事と云
 唐の芥子園画伝の巻風巻にして江戸にもコレあり
 付両書揃ありとの諸先生持開強記の巻言事と云の語を
 何げなき猶と云ふ遊軍花街劇場の奇縁と考へ小説
 九百と云ふ百鬼園の巻の標は夜へ遠國一巻の巻
 票ハいにし北里お福をありし付大吏をかりし切手にて
 楊金と云ふと云ふありと云ふ事係取の史跡残花
 所謂廻指紙成屋形者之頸情と云ふと云ふ
 名をいふと云ふ名は縁取の吉原と云ふと云ふ
 店をありてと云ふ名ありと云ふ事係取の史跡残花
 夫の山に住流言事若く所の吉原と云ふと云ふ

角所山茶煙茶家並
 音料えん大万字や店之内
 又歌入

小唄えん 日一内
 三浦の太夫今金山の姉を
 いふをいふと云ふ人いかり
 今もいふと云ふと云ふと云ふ
 家では女名をいふと云ふ
 二代目ありと云ふと云ふ

同春あけを所の
 あける 桐を市在る
 たり是宿を市在る
 然し日乃孫傳系
 不考

享保抜の西巴^ノ尼言^ノト小柳小柳小辰小世小吉
小西小右更小主水小式部小幸相小治氏小源氏
之小石^ノ同^ニ小衣^ノ之^ニ訓^ニト^レ可^シトバ^レ付^ル小^ノ隆^ノ二^ノノ
名^ノ家^ノト^レハ^シニ^ハナ^リ吉^ノ京^ノ第^ノ瑞^ノ川^ノハ^シ元^ノ禄^ノ七^ノ年^ノ中^ノ
戊^ノの^ニ板^ノえ^ノ禄^ノ七^ノ年^ノ甲^ノ戌^ノト^レ富^ノ永^ノ六^ノ年^ノ己^ノ巳^ノ乃^ノの
酉^ノの^ニ一^ノハ^シ富^ノ永^ノ二^ノ年^ノ己^ノ巳^ノト^レ酉^ノの^ニ十^ノ月^ノ八^ノ日^ノニ^ハセ^レ
ハ^シ富^ノ永^ノ二^ノ年^ノに^ハ富^ノ永^ノ一^ノ

吾云 考證的確 如向燒香

次におし^レた^リう^ノめ^ノの^ニ紋^ノ糸^ノ又^ハハ^シ所^ノ席^ノ及^ハ役^ノ者^ノの^ニ
紗^ノ糸^ノ花^ノ街^ノ劇^ノ場^ノの^ニ古^ノと^レ臨^ノ驗^ノ也^ハ其^ノ名^ノを^レ考^レず^ルも
ある^ニは^シと^レ百^ノ富^ノ永^ノ小^ノ備^ノ二^ノの^ニ考^レ證^ノ一^ノ精^ノ力^ノを^レ
費^ノす^ニあ^ラし^テ光^ノ陰^ノを^レと^レせ^ニし^テは^シ標^ノ本^ノ古^ノと^レや^レ
と^レ考^レず^ルも^レ富^ノ永^ノ

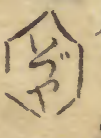
十 邦海^ノノ^ニ名^ノ

蜀山人^ノ云





江戸に^ハる^ノご^ノ市^ノに^ハ振^ノ袖^ノき^テる^ノ女^ノの^ニ顔^ノに^ハ板^ノ也^ノ俗^ノ

富永七年三月吉日 父を奉八占あり板



乃女歌

上上世  

堀田市左衛門 市村屋
孫木 翁堂 川島崎

遊

市左衛門三つ子成少将つとせと成りしとせり人成次
也右衛門十郎を川合盛三にとるなり 常松よ六月
子申と成工辰娘の身成りに冠まるとさうよのいひまき
蜀山伊使梅室水十年申子身成歌ち更なり 元文二年
丁巳すて二年申あまの市左衛門廿林と成り子成更なり
たて一人の老て改名したるもあまのいひまき
貞享十一年幸更取賦月、子成 清和のつとの申
後者の名をいへて 詠遊の白アリ

りまきよまのすうも 古角

松本屋

妹背の山とが伊敷山

古初月

堀田子を権りて石車

堀田市を

と何よハあまのすもハハ之にけ 冷の風をいふに
室水の比あるハ林と成りて

孝保二年取

後者あ茶湯

堀田林と成

中村屋

中ノ位ナレバ室水の林と成ハアラガルハニ

あまのい

文化戊辰季友上梅雨申蜀山人云に昔名百三

古納子云しむくたいもふい

去砂

製法 刻たる葉を赤く去り、交合せしめ、
刻たる葉を赤く去り、交合せしめ、

下丸

製法 刻たる葉を赤く去り、交合せしめ、
刻たる葉を赤く去り、交合せしめ、

白芍薬

膏澤所

此三種生じて用ひ時ハ血を活養するの功あり
云砂す時ハ人行脚の乏乏と申す神するの功あり

塩水製法

製法 刻たる葉を塩水に浸し、
製法 刻たる葉を塩水に浸し、

黄栢

生じて用ひ時ハ苦味強しき之塩水製法ハ
下砂一法中ハ滋養を去るの功あり

兔絲子

生じて用ひ時ハ初産一製法を治すハ
滋養を去るの功あり

一度陳皮

生じて用ひ時ハ味を味一脾を和し製法一
常道を治す

牛膝

生じて用ひ時ハ滋養を去るハ
下を導き強筋を補ふ

杜仲

生じてハ初産を去るハ製法を治すハ
滋養を去るの功あり

鹿角

製法 刻たる葉を赤く去り、交合せしめ、
製法 刻たる葉を赤く去り、交合せしめ、

炒製法

牡丹皮

生じて用ひ時ハ血を破り腫を押す製法を述べハ
血中の方を浮し又陰血を養ふ

沃浮

生じて用ひ時ハ濁を止久温を除く製法を述べハ
去をす水を製法に

葶苈子

生じて用ひ時ハ肺癰肺腫を治し製法を述べハ
解を理下温と法に

山茱萸

生じて用ひ時ハ濁を止久製法を述べハ陰を
養し熱を清す

山梔子

生じて用ひ時ハ肝熱を除く製法を述べハ之
焦の方を通す法

金銀花

生じて用ひ時ハ熱を清し毒を解し製法を述べハ
其の血を養ふ虚を補ふ

一 高砂

生じて利が時ハ脚に入滞を行す製法を述べハ
胃を養ふハ食を止す

一 木仙

生じて利が時ハ脚を止す製法を述べハ
根仙枝根脚力ありと述べ

一 破巻仁

生じて利が時ハ脚を去り毒を以て製法を述べハ
根力を述べ

一 甘菊

生じて早に自腹の毒を去る製法を述べハ
大を以て風を除く

酒効あり

一 川續断

生じて用中時ハ跌撲所傷と治す製法を述べハ
骨髄を養ふ

一 延胡索

生じて用中時ハ心腹の拘神と治す製法を述べハ
經を通し血を活血

○ 有人自袖中出示之展見則三途川優遊也

云漏法中三途河

而人于羸朽血刀火

業波識浪滿前坡

髪髻一塌去夢雙



去探幽部一册

沃庵和南記之

○ 近世奇跡考 系傳作

大津通考

大津松或ハ近分松といふつきの時代より始りしに
詳ふと云はるる録に本段 東海屋繪圖 大津大石田松松
ソノありと云ふも又も色紙の白

大津松の事のもろ一先ハ何備

○ 大津松の事のもろ一先ハ何備
此の松は元禄の時に松松を名にかりしと云ふ 本朝信流志
下肥前の山中に毛防といふ者何松林に生きたる農家
木葉し人死すと云ふ等傳とありてこれと其葉に本号ハ大津松
のナリ松林といふ世に傳つて信世又平の事といふも
たしと云ふ信流一書より信世又平ハ神前の子姓ハ荒木
如の姓山石佐を曰はすしと云ふ世の人物を扱ふに云ふ時の人

淳世又年と稱し世にしるす後ハ世に舞ハル

又年といふは淳なり高保

四年領城を魂香といふ淳なり土佐の高保淳世又年を

高保を淳なり武別は淳なり高保なり淳なり

高保の淳なり高保なり高保なり高保なり

又年といふ者淳なり淳世又年なり淳なり

淳なり淳なり淳なり淳なり淳なり

淳なり淳なり淳なり淳なり淳なり

淳なり淳なり淳なり淳なり淳なり

淳なり淳なり淳なり淳なり淳なり

淳なり淳なり淳なり淳なり淳なり

風を淳なり古代の方律法を考うに古土佐の風味しるす
淳なり淳なり淳なり淳なり

貞享四年「風流旅日記」下巻律法分依んの及之申書

奴やりの時のいきりあひの法をうかが大岩さくわくは貞享

の法にらぬ奴のやり時たの法はしるす

あの日高坂へゆくとき花所ををりし時大橋所にて居り

いふをゆけり上階いあつとをいといふあはむし精まのつらき

あつとをいといふと階まよふにまなによりきてもくも利にす

よのあつと高坂もたたり

よのあつと高坂もたたり

